

平成29年9月

寺地紗弥香 学位論文審査要旨

主査 花島律子
副主査 吉岡伸一
同 兼子幸一

主論文

Comparison of neurocognitive function in major depressive disorder, bipolar disorder, and schizophrenia in later life: A cross-sectional study of euthymic or remitted, non-demented patients using the Japanese version of the brief assessment of cognition in schizophrenia (BACS-J)

(老年期における大うつ病性障害、双極性障害、統合失調症の神経認知機能の比較：日本版統合失調症認知機能簡易評価尺度 (BACS-J) を用いた、躁うつ寛解期の又は寛解した非認知症患者の横断研究)

(著者：寺地紗弥香、山田武史、朴盛弘、横山勝利、松村博史、兼子幸一)

平成29年 Psychiatry Research 254巻 205頁～210頁

参考論文

1. Milnacipran influences the indexes of I-metaiodobenzylguanidine scintigraphy in elderly depressed patients

(高齢のうつ病患者において、ミルナシプランはI-メタヨードベンジルグアニジンシンチグラフィの指標値に影響する)

(著者：横山勝利、山田武史、寺地紗弥香、朴盛弘、太田靖利、山梨豪彦、松村博史、中込和幸、兼子幸一)

平成26年 Psychiatry and Clinical Neurosciences 68巻 169頁～175頁

審査結果の要旨

本研究は老年期で躁うつ寛解期の又は寛解した非認知症の大うつ病性障害、双極性障害、統合失調症患者を対象に、日本版統合失調症認知機能簡易評価尺度（BACS-J）を用いて神経認知機能障害を比較した横断研究である。その結果、双極性障害、統合失調症は同程度の認知機能障害を示す一方で、大うつ病はいくつかの認知機能領域と composite score において双極性障害、統合失調症よりも障害の程度が軽度であった。3群の認知機能障害のプロフィールは類似しており、運動機能、遂行機能が相対的に高く、注意と情報処理速度が低かった。本論文の内容は、精神医学の分野で、老年期の精神疾患にみられる認知機能障害は質的なものよりも量的なものであることを示唆するものであり、明らかに学術水準を高めたものと認める。